

【中学生の部：会長賞①】

「明るい未来へつなげる今」

栃木県・佐野市立北中学校
2年 白石 桃菜 さん

健常者は幸せに生きることができ、障がい者は幸せではない、かわいそう。このように考えている人はいないだろうか。私は「個性が違う。だからそれぞれの生き方がある」と考えている。

私には、障がいをもつ六年生の妹がいる。知的障がいと身体的障がいを併せもつ、重複障がいだ。妹と過ごす日常生活の中で、私は日々たくさんのことを学ぶ。家族に障がいをもつ妹がいることで、たいへんな思いや苦勞をすることもあるが、喜びやうれしさを感じることもたくさんある。妹が、家族に笑顔をあふれさせてくれることもある。

妹は、特別支援学校に通っている。話もできないし、歩けない。だから車いすに乗っている。話ができないからといって、コミュニケーションが全く取れないわけではない。表情や動作などで心を通い合わせることができる。妹は、学校やリハビリステーションで歩く練習を積んでいる。そのかいあって、介助歩行ができるようになった。言葉の理解が難しく、相手に気持ちが伝わらないこともあるが、私たちの働きかけで大きく変わることもある。私たちが思いやりの心をもって接すれば、きっと心の壁はなくなるのだ。

妹と出かけるときに困ることが二つある。一つは、障がい者用のトイレが少ないことだ。なかなか見つけるのがたいへんだし、全く見つからないこともある。

二つ目は、階段が多いことだ。介助歩行も難しい場合は、諦めるか車いすを持ち上げるしかない。しかし、車いすを持ち上げることには危険が伴う。

このように困ることもたくさんあるが、だからこそ人の優しさを感じることもある。階段の多い場所で困っていたら、一人の男性が、「何かお手伝いすることはありますか。」と、声をかけてくれた。そして、私の父が妹を抱え、男性は車いすを抱えて、階段の終わりまで運んでくれた。私たちの様子を気にしながら通り過ぎていく人もいたが、このように直接声をかけてくれる人の存在が、私はとてもうれしかった。そして、その男性の姿は、とてもかっこよく輝いて見えた。

私たち家族が出かけて、過ごしやすい場所が二箇所ある。羽田空港とディズニーランドだ。羽田空港には、「スマイルサポート」というサービスがある。そ

れは、小さな赤ちゃんや妊婦さんなど行動に時間がかかる方が、一般の方とは時間をずらして乗降できるサービスだ。他の人に迷惑をかけず、慌てずにいられるので、とても助かっている。

ディズニーランドには、車いすに乗った人でも楽しめるような工夫が多くのアトラクションでされている。車いすごと乗れる乗り物がたくさんあるため、妹もいろいろな乗り物に乗れた。また、乗り物に乗るまでの間に急な坂もあるため、裏口から入れる配慮もされている。その場合は、紙に待ち時間とアトラクション名を書いてもらい、その時間になったら乗ることができる。

今の社会は、差別のない平等な社会であるとは言えない。障がいに対する偏見があり、十分な理解がされていないと感じることも多い。また、福祉施設も十分ではない。誰もが一人の同じ人間として笑顔で過ごせる社会に変えるために、私たちにできることは何だろうか。それは、一人一人が考え方を少しずつも変えていくことではないだろうか。出会いやふれあいを大切にし、一人でも多くの人が障がいについて理解することが、差別のない平等な社会を実現するための第一歩だと考える。今後私たちは、障がいのある方と互いを認め合い、心の輪を大きく広げ、ともに歩んでいける社会を作っていかななくてはならない。私たちの誰もが、場に応じた対応をし、必要な手をさしのべることのできる社会になることを心から願う。